

個人レベルから見た真宗道德の特性と ダイナミクス

ウーゴ・デッセイー

(日本キリスト教協議会 (NCC) 宗教研究所研究員)

(和文要旨)

本稿は、筆者が 2008 年に真宗信者 400 人に対して行った調査の結果に基づいて、真宗教団の道德の様相を考察するものである。真宗信者は精神的生活を志向するが、社会活動への意欲を欠いているというわけではなく、政治的に中立の活動には比較的よく参加する傾向が見られる。回答者には思いやりを重視する態度が顕著で、一番重要な価値観の中に日本の伝統的価値観である協力、正直、礼儀がある。恩返しと重なる報恩という価値観も強調される。僧侶以上に門徒の方が権威主義的価値観を重視するが、全国平均と比べると、その態度はある程度低下するようである。しかし、権威主義的価値の支持と宗教意識には関連性が見られる。真宗信者が平等を重視する傾向はあるものの、他宗教信者の宗教的平等は全面的に認められていないようである。その上、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義にも関連性が指摘できる。真宗教団では非暴力の態度が重視され、それが平和と死刑制度に対する信者の姿勢に意味合いをもつ形跡がある。

(SUMMARY)

The results of a survey conducted by the author among 400 Shin Buddhist practitioners provide indications for the analysis of Shin Buddhist morality and its correlation with religious consciousness. Despite the doctrinal intricacies relating to the teaching of other-power, there are signs that the practitioners' morality is oriented to Shin Buddhist values such as compassion, *hō-on*, and peace of mind, to traditional Japanese values such as cooperation, manners, honesty, repaying of debts, and filial piety (less, however, than the Japanese average), and to other core Shin Buddhist values, such as equality and non-violence, which may be characterized as modern values as well. It seems that the inclination toward peace of mind does not inhibit forms of social engagement and

a marked emphasis on equality and non-violence, which also appear to be positively correlated to religious consciousness. However, high standards of religious consciousness are also shown to be related to religious exclusivism. The evaluation of values such as authority, patriotism, loyalty, and obedience is relatively low. On the other hand, it may be seen that the inclination toward patriotism and ethno-cultural defense tends to be significantly correlated to higher standards of religious practice and belief.

1. はじめに

真宗ではこれまで倫理と社会運動という問題が慎重に扱われてきた。その主な理由は、創始者親鸞（1173-1262）が重視した「はからい」という教義、つまり自分の打算を捨てる必要性にある。親鸞は、人間は「はからい」を捨て「他力」という阿弥陀の働きに自らを任せることができると考え、「自力」による善行が「信心」という中心的宗教体験と浄土「往生」の障害になると主張した。しかし、親鸞は道德の実践を不可能と考えていたのではなく、むしろ道德を「他力」という考えに従って慎重に考察すべきと見ていた。真宗倫理の基礎には阿弥陀の本願の普遍性があり、これを前提として親鸞は念仏者を「同朋」とみなし、彼らの平等を認めた。さらに、阿弥陀の慈悲に報いて世の中の悪を捨てるよう信者に勧めた。さらに留意すべき点は真宗の批判的側面であり、これは「神祇不拝」の概念に密接に関係する。拙著でも取り上げたが、これらの側面は現代の真宗倫理に関する論議と社会運動の基盤となっている。例えば、「同朋社会」の重視と「神祇不拝」の概念は、真宗が進めている差別問題と平和主義の運動の背景にも見られる。この点において、組織・運動家によってより積極的に取り組まれているのが、靖国問題、被差別部落問題、ハンセン病問題である。さらに、1980年代以降になると、ターミナルケアと社会福祉に従事するビハーラ活動などにもその領域は広がりを見せた¹。だが、真宗は信仰が社会生活から分離しているという点が、様々な機会に批判されてきた。津田左右

¹ Ugo Dessi, *Ethics and Society in Contemporary Shin Buddhism*, Berlin: Lit Verlag, 2007, pp. 141-190 を参照。

吉、加藤周一などがこのような批判を加えている²。一方、真宗信仰についての消極的理解を懸念している真宗作家も少なからずいるようである³。

2. 真宗教団における宗教意識と善行への期待

先に述べた真宗教団における他力信仰と社会行動の間の問題、および真宗道德の特性を確認するため、本稿筆者は2008年に日本26都道府県の真宗信者400人に対し、調査を実施した。回答者のほとんどは本願寺派・大谷派に属する門徒(280人)と僧侶(120人)だが、門徒の平均的態度が明らかになるように、総代を約1割に制限した。この調査の目的は二つある。ひとつは真宗信者の道德観と社会行動の関係を個人レベルで研究すること。もうひとつは門徒の道德観と宗教意識との関連性を確かめること。以上を踏まえて、利用する宗教意識の指標を二グループに分けた。1) 第一のグループには真宗実践・信仰に関連する項目が含まれる。つまり帰敬式を受ける、報恩講によく参詣する、朝夕の勤行をよくする、法話をよく聞く、真宗聖典・宗教書をよく読む、念仏の実践を正しく理解できるという6項目である。2) 第二のグループには「神祇不拝」(神々の崇拜の拒否)と関係している項目が含まれる。つまり神棚にお供えをしない、お守り・お札を持たない、地域の神社行事に参加しない、初詣でをしないという4項目である。第一のグループに関して言うと、図1に見られるように、帰敬式を受けた門徒の割合は42.1%であり、彼らは一般より高い宗教意識を持つと仮定した。

第一のグループに含まれるもう一つの宗教意識指標は「念仏の称え」に係る。教義上厳密には、念仏とは死者の供養・功德を積む・浄土に行き生まれるなどのためではなく、仏恩に報謝するためのものとされている。図2で示すように、念仏には仏恩への報謝以外に意味がないと考える門徒は18.2%で、彼らはこのグループの中でも、特に高い宗教意識を持つものと思われる。

² 信楽峻彦「親鸞における信と社会的実践」『親鸞教学』第38号、1981年: 76-78頁を参照。

³ たとえば、阿満利磨『社会をつくる仏教—エンゲイジド・ブディズム』、人文書院、2003年、29-30頁を参照。

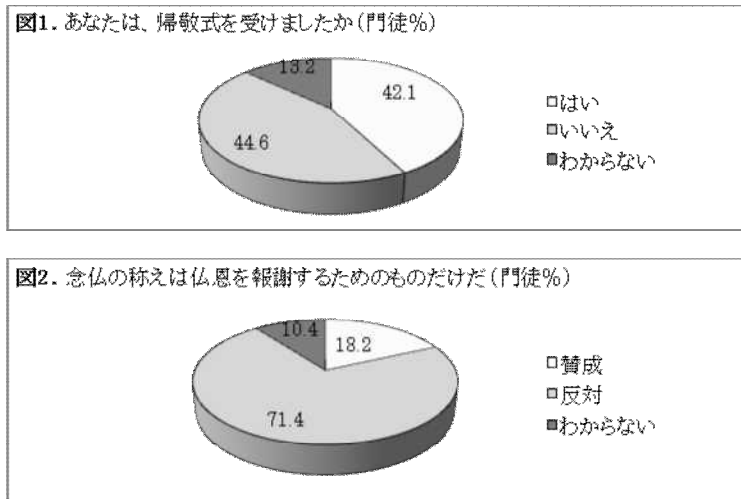
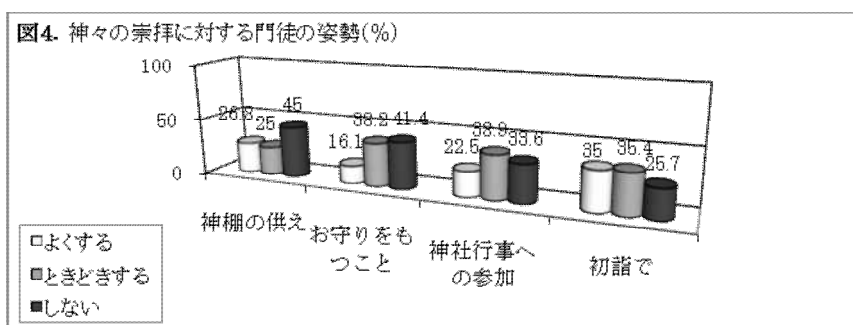
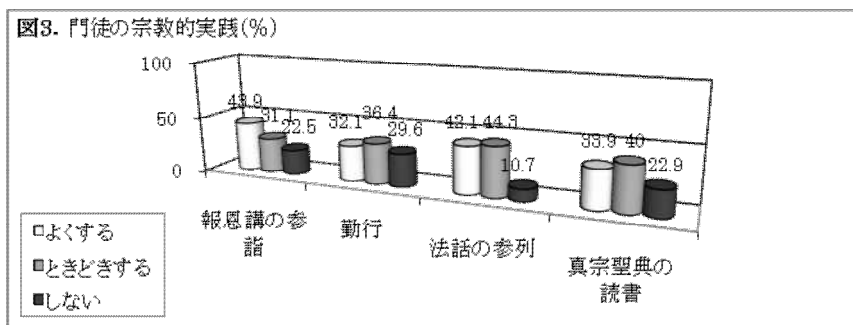


図3に示す四つの項目は宗教意識指標の第一のグループに属する。図に見られるように、報恩講によく参詣する門徒の割合は43.9%で、朝夕の勤行をよくする門徒の割合は32.1%、法話をよく聞く門徒の割合は42.1%、真宗聖典・宗教書をよく読む門徒の割合は33.9%である。これらのケースに該当する門徒は、平均的な門徒よりも宗教意識が高いと仮定した。

図4にある四つの項目は宗教意識指標第二のグループに属する。図で示されているように、神棚にお供えをしない門徒の割合は45%で、お守り・お札を持たない門徒の割合は41.4%、地域の神社行事に参加しない門徒の割合は33.6%、初詣でをしないの門徒の割合は25.7%である。これら四つのケースでは神々の崇拝の拒否が堅持されており、やはり平均的門徒よりも宗教意識がより高いと仮定した。



では、真宗信者の道德と社会行動の特性は何であろうか。表1に真宗信者の基本的価値観23個を列挙した。これらの価値観の具体的内容は以下のとおりで、四つのグループに分けられる。1. 真宗の典型的価値観（他人への思いやり、報恩、念仏の称え、心の平安）2. 日本の伝統的価値観（協力、正直、礼儀、人への尽力、親孝行、法律尊重、恩返し、先祖の崇拜、集団意識、伝統・習慣の順守、愛国心、忠誠心、従順、権威への服従）3. 近世的・近代的価値観（勤勉、仕事の成功）4. 真宗的および近代的価値観（非暴力、平等、社会活動）である。

表1. 真宗信者の価値観(「非常に重要」と「かなり重要」を合計した割合[%])

	全体	門徒	僧侶
他人への思いやり	93.0	92.1	95.0
人と協力し合うこと	91.8	90.7	94.2
礼儀正しいこと	90.2	91.1	88.4
正直であること	90.0	89.3	91.7
人のために尽くすこと	86.6	86.4	86.6
親孝行すること	85.6	88.2	79.1
報恩・仏恩に報謝すること	85.2	83.3	90.0
非暴力・不戦	84.0	81.4	90.0
平等・非差別	84.0	82.5	87.5
心の平安をもたらすこと	84.0	85.3	80.9
法律を守ること	81.3	82.5	78.3
念仏を称えること	80.2	76.5	89.2
恩返しすること	78.7	80.7	74.1
勤勉であること	77.0	78.2	74.2
先祖の崇拜	73.7	80.0	59.1
社会活動に参加すること	73.2	74.2	70.9
集団の一員であること	58.2	60.7	52.5
伝統や習慣に従うこと	54.0	57.5	45.8
愛国心を持つこと	52.3	58.6	37.5
忠誠心を持つこと	50.7	57.9	34.1
仕事で成功すること	45.3	48.6	37.5
従順	38.5	40.3	34.1
権威ある人々に敬意を払うこと	37.7	42.2	27.5

3. 真宗教団における真宗的価値観

第一位に挙がっている「他人への思いやり」には(93%)仏教的なニュアンスが

あり、大乘仏教、または真宗の基本的な価値観としても考えられる。今述べたことは、門徒より（92.1%）僧侶の方が（95%）「他人への思いやり」を選んだ理由を説明できるかもしれない〔表1を参照〕。「報恩・仏恩に報謝すること」の項目が重視されているということ（85.2%）は、真宗信仰と道德意識の間に、絶えぬ緊張関係があることを示している。つまり、親鸞が説明したように、真宗においては善行が往生の原因ではなく、阿弥陀如来の慈悲に報いて（「報恩」）世の中の悪を捨てることができると信じられているのだが⁴、「報恩・仏恩への報謝」は、「恩返し」という日本の伝統的価値観と重ね合わされているようにも見受けられるのだ。僧侶は「礼儀」（88.4%）、「人への尽力」（86.6%）、「親孝行」（79.1%）より「報恩」（90%）を重要視しているものの、門徒はそれほどでもない（83.3%）。もう一つの真宗的価値観「心の平安」を84%の信者が選択した。言うまでもなく、これは仏教伝統の根本的価値観である。しかし、真宗の伝統では、蓮如の唱える「安心」、「王法・仏法論」、「妙好人」の信心深さとの関係などで「心の平安」が特徴的な意味合いを持ってきた⁵。そして、僧侶（80.9%）よりも門徒（85.3%）の方がこの価値観を選んでいる。全体的に、真宗信者にとっては社会活動よりも宗教的・精神生活の方が大切なようである。表1に見られる通り、「社会活動」を重視する信者は73.2%である。この点をより明らかにするために、表2の項目を加えた。世界平和のためには何を一番に為すべきかという質問である。予想通り、社会活動より（13.2%）心の平安を選んだ信者の割合は高い（62.8%）。

表2. あなたは世界平和のために何を一番すべきだと思いますか（%）

	全体	門徒	僧侶
心の平安をもたらすこと	62.8	61.1	66.7
国連活動を支持すること	19.5	20.4	17.5
社会活動に参加すること	13.2	13.2	13.3
防衛力を強化すること	1.5	1.8	0.8
わからない	3.0	3.6	1.7

真宗では宗教的・精神生活への傾向があるからといって、そこに社会運動への意欲がないというわけではない。靖国問題、被差別部落問題、ハンセン病問題、社会福祉といった問題は組織レベルで取り組まれ、この活動の基礎には、特に「同朋社

⁴ 例えば、真宗聖教全書編纂所『真宗聖教全書二』、大八木興文堂、2003年、702頁を参照。

⁵ 例えば、黒田俊雄『黒田俊雄著作集・第二巻』、法藏館、1999年、185-196頁。信楽峻磨「近代における真宗倫理の諸相」『印度学仏教学研究』、第49（2）号、2001年、550-558頁を参照。

会」の重視、「神祇不拝」の概念、教団の戦争責任の反省がある⁶。だが、真宗信者の行う社会活動はどのようなものなのか、より詳しく見て見よう。回答者が「現在している」および「したことがある」活動の種類を、表3に示した。門徒にとって特に人気の高いのが町内会(「現在している」と「したことがある」を合わせて80%)と地域の美化・環境保全(79.3%)に関連する活動だが、氏神の祭と協力する人も多い(65.7%)。真宗教団が組織レベルでサポートしている障害者への支援活動(48.9%)とビハーラ活動(8.9%)については、ある程度参加の形跡が見られる。表3の下部にあるが、差別反対運動(23.2%)と憲法九条の改正反対運動に(11.1%)参加する人数は少なくないと思われる。しかし、上部の項目は政治的に中立の活動に属するので、このことは日本の社会運動の一般的弱点を反映しているように思われる。僧侶の場合でも、町内会(75.9%)と地域の美化・環境保全(75.9%)に関連する活動が顕著だが、氏神の祭と協力する回答者割合は4割に下がる。やはり、真宗の布教を行う僧侶割合は高い(65%)。ここでも上部の項目は政治的に中立の活動を指すわけだが、門徒の場合より、差別反対運動(40%)、憲法九条の改正反対運動(33.3%)、靖国参拝反対運動(23.3%)、教育基本法の改正反対運動(20.9%)、ハンセン病の元患者の支持(26.7%)という、政治的に慎重を期する問題に取り組む割合は僧侶の方がかなり高い。社会活動への参加と宗教意識には、ある程度の関連性が見られる。表4にあるように、報恩講の参詣、勤行、法話の参列、真宗聖典・宗教書の読書をよく行う門徒には障害者への支援と差別反対運動への参加の割合が明らかに高くなる。

⁶ Ugo Dessì, *Ethics and Society in Contemporary Shin Buddhism*, pp. 141-182 を参照。

表3. 真宗信者の社会活動(%)

	門徒		僧侶	
	現在している	したことがある	現在している	したことがある
町内会・自治会	32.5	47.5	26.7	49.2
地域の美化・環境保全活動など	24.3	55.0	14.2	61.7
氏神の祭の協力	21.8	43.9	5.0	35.8
スポーツ・レクリエーション活動	13.6	58.9	15.0	55.8
真宗の布教	9.3	21.1	45.0	20.0
交通安全活動	8.9	46.8	10.0	41.7
障害者への支援	5.0	43.9	10.8	41.7
日本遺族会の活動	3.6	7.5	1.7	6.7
憲法九条の改正反対運動	3.2	7.9	13.3	20.0
差別反対運動	2.5	20.7	7.5	32.5
靖国参拝反対運動	2.1	3.2	10.0	13.3
ビハーラ(ホスピス)活動	1.4	7.5	2.5	20.8
教育基本法の改正反対運動	1.4	6.1	6.7	14.2
ハンセン病の元患者の支持	0.7	9.6	9.2	17.5

表4. 社会活動 × 宗教意識(「現在している」と「したことがある」を合計した割合[門徒%])

	障害者への支援	ビハーラ(ホスピス)活動	差別反対運動	憲法九条の改正反対運動
全体	48.9	8.9	23.2	11.1
帰敬式を受けた人	52.6	11.0	33.0	14.4
報恩講によく参詣する人	59.3	12.2	30.9	13.8
朝夕の勤行をよくする人	58.9	12.2	30.0	15.5
法話をよく聞く人	56.8	11.8	32.2	13.5
真宗聖典・宗教書をよく読む人	57.9	12.7	34.7	14.7
念仏の称えは仏恩を報謝するためのものだけだと思ふ人	49.1	11.8	25.5	9.8
神棚にお供えをしない人	46.1	8.7	23.0	10.3
お守り・お札を持たない人	50.0	12.0	26.7	14.6
地域の神社行事に参加しない人	46.9	9.6	19.1	11.7
初詣でをしない人	44.4	15.3	22.2	13.9

4. 真宗教団における日本の伝統的価値観

表1に示したように、「思いやり」の下に「協力」(91.8%)、「礼儀」(90.2%)、「正直」(90%)、「人への尽力」(86.6%)、「親孝行」(85.6%)という5つの日本の伝統的

価値観が並んでいる。そのうち、「協力」、「礼儀」、「正直」、「人への尽力」を重要視する態度は全国の平均に近い〔図5を参照〕⁷。僧侶の場合、真宗的価値観である「報恩・仏恩への報謝」(90%)、「非暴力」(90%)、「念仏の称え」(89.2%)は、「礼儀」(88.4%)、「人への尽力」(86.6%)、「親孝行」(79.1%)を上回る。門徒の場合「思いやり」に続く徳目は「礼儀」(91.1%)であり、「親孝行」(88.2%)は「人への尽力」(86.4%)に先行する。表1が示すとおり、僧侶の場合「先祖の崇拜」の重要性はかなり下がる。おそらく、真宗における阿弥陀如来の中心性がその理由のひとつだろう。この中心性は、東西本願寺が強調する「仏壇は死者や位牌のためのものではない」という主張にも、その具体例が見られる⁸。

だが、「親孝行」の重要性は全国平均より低いようである。図6を見てみよう。南山宗教文化研究所の調査では伝統的価値観(親孝行・恩返し)と近代的価値観(権利尊重・自由尊重)の中では「親孝行」が最上位にきている(64.6%)⁹。これと比較すると、私が行った調査においては「親孝行」を選んだ門徒(56.4%)と僧侶(40.8%)の割合が相対的に低いのが見て取れる。

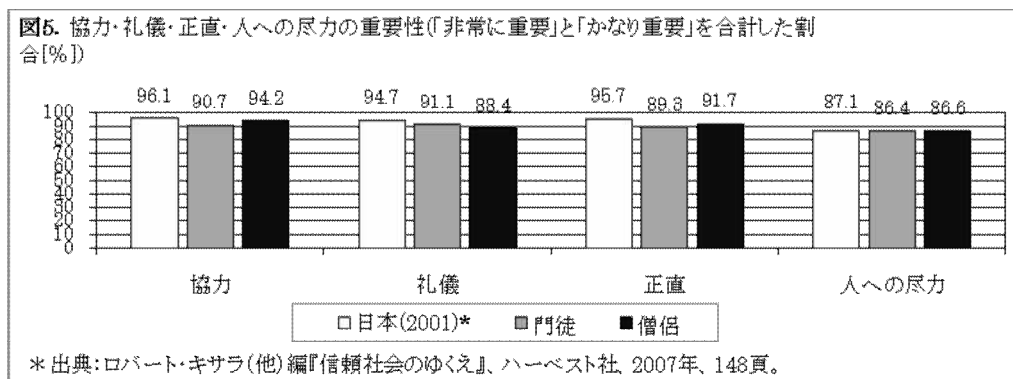


図6の4項目の中では、門徒にとって最も重要な価値観は「親孝行」だが、僧侶にとっての最重要は「恩返し」である(50.8%)。一方、「恩返し」は門徒にとって第2位の位置を占める(50.4%)。「恩返し」が重視されている理由は、おそらくのところ、日本古来の徳目である「恩返し」が真宗の典型的価値観である「報恩・仏恩への報謝」とも重なり合うからではないか。又、興味深く思われるのは、権利尊重意識の全国平均(48.0%)が、真宗門徒(30.7%)・僧侶(38.4%)の値を上回っ

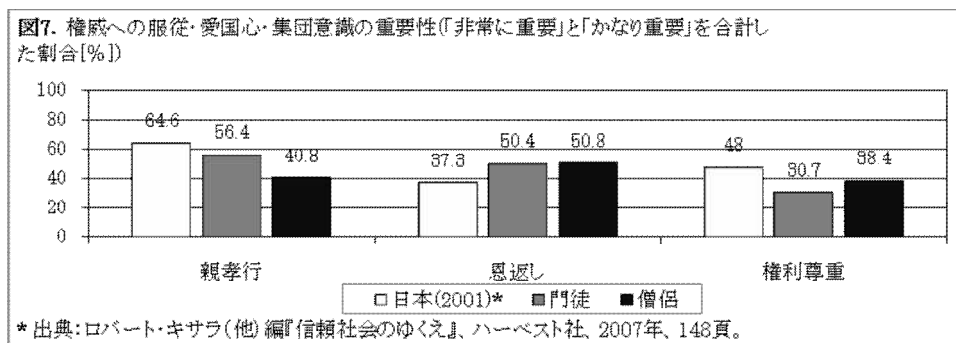
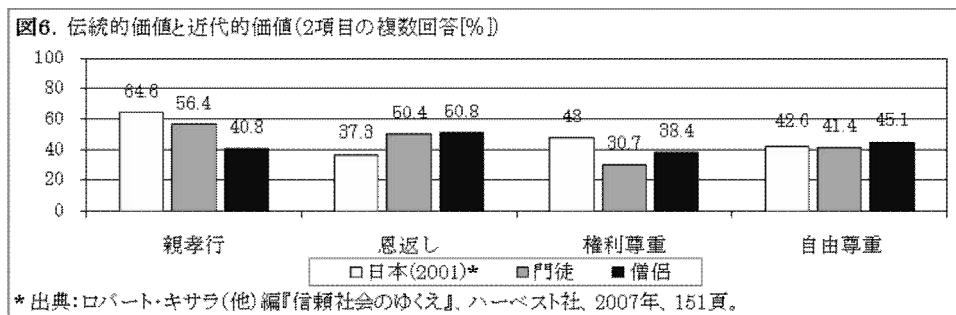
⁷ 全国平均の出典は南山宗教文化研究所の枠組み内で2001年に行った調査の結果である。ロバート・キサラ(他)編『信頼社会のゆくえ—価値観調査に見る日本人の自画像』、ハーベスト社、2007年、148頁を参照。

⁸ 浄土真宗本願寺派『浄土真宗必携』、本願寺出版社、2004年、229頁。真宗大谷派宗務所『真宗の教えと宗門の歩み』、東本願寺出版部、2003年、75頁を参照。

⁹ ロバート・キサラ(他)編『信頼社会のゆくえ—価値観調査に見る日本人の自画像』、151頁を参照。

ている点である。伝統的価値観と近代的価値観の対立に関して言えば、真宗信者の方が全国平均よりも伝統的傾向を持つようである。

ロバート・キサラが行った調査によれば、日本人の権威主義的価値観の尊重は、他の価値観の場合と比較すると相対的に低い¹⁰。真宗信者の場合も同様で、権威主義的価値観である「集団意識」(58.2%)、「愛国心」(52.3%)、「忠誠心」(50.7%)、「従順」(38.5%)、「権威への服従」(37.7%)を支持する人の割合はやはり低い。だが、図7に示すように、真宗信者の場合、その尊重意識はより弱まる形跡がある。「権威への服従」、「愛国心」、「集団意識」を支持する僧侶のパーセンテージは、それぞれ全国平均よりもおよそ20%ずつ低い。門徒のケースでは、全国の平均と比べて、「権威への服従」と「集団意識」の重要性が下がるが、「愛国心」を選んだ人の割合はあまり変わらない。全体的に言えば、先に観察した真宗信者の伝統的傾向は権威主義的価値になかなか当てはまらないようである¹¹。



¹⁰ 同書、148頁を参照。

¹¹ Ugo Dessi, "Shin Buddhism, Authority, and the Fundamental Law of Education," *Numen*, Vol. 56, No. 5, 2009, pp. 523-544 を参照。

表 5. 権威への服従・愛国心・集団意識の重要性 × 宗教意識(「非常に重要」と「かなり重要」を合計した割合[門徒%])

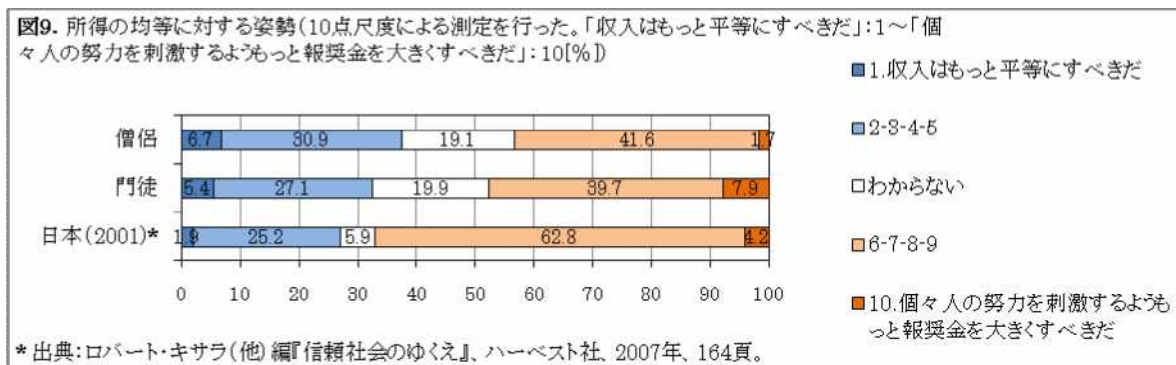
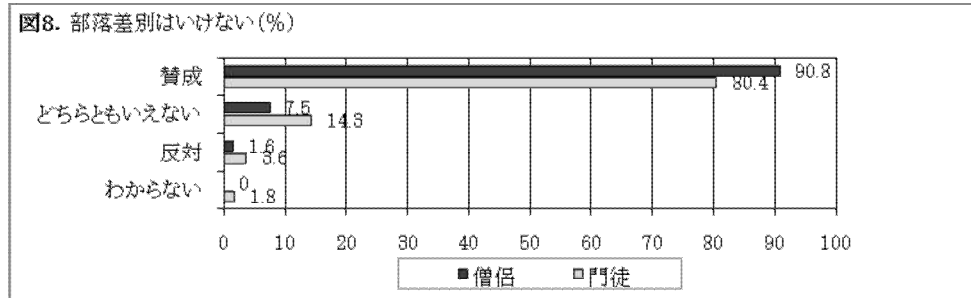
	権威への服従	愛国心	集団意識
全体	42.2	58.6	60.7
帰敬式を受けた人	50.0	63.5	66.1
報恩講によく参詣する人	56.9	71.6	73.1
朝夕の勤行をよくする人	53.3	70.0	71.1
法話をよく聞く人	55.0	72.1	71.2
真宗聖典・宗教書をよく読む人	48.4	62.1	69.5
念仏の称えは仏恩を報謝するためのものだけだと思う人	35.3	49.0	54.9
神棚にお供えをしない人	39.6	46.0	52.4
お守り・お札を持たない人	41.4	50.8	52.6
地域の神社行事に参加しない人	31.9	45.7	51.1
初詣でをしない人	34.7	34.7	52.8

興味深いことに、権威主義的価値観の尊重と宗教意識の高さには関連性が見られる〔表 5 を参照〕。より正確に言うと、先に述べた第一のグループに属する宗教意識指標（帰敬式を受ける、報恩講の参詣・朝夕の勤行・法話の参列・真宗聖典・宗教書の読書をよくする）を念頭に置くと、宗教意識が高いほど権威主義的価値の尊重が強くなると言える。それと違って、念仏の実践への深い宗教意識を持つ門徒については、その割合が約 1 割低くなる。同じように、神々の崇拝の拒否と関係する第二の宗教意識指標のケースでは、宗教意識が高いほど権威主義的価値を尊重する意識は弱くなるようである。今述べたデータは、組織レベルでしばしば見られる神々の崇拝の拒否と真宗の批判的側面との関連性(例えば、靖国問題に関する声明)が、個人レベルにも当てはまる指摘として考えられよう。

5 . 真宗教団における平等主義と宗教的排他主義

「平等」・「非差別」は真宗信者から高く評価されている。表 1 にあるように、この価値観を選んだ僧侶は 87.5%、門徒だと 82.5%である。言うまでもなく、「平等」とは近代的な価値観だが、真宗では「同朋」という教団のキーワードとも密接に関係する。「同朋」とは阿弥陀如来の本願の普遍性に基づいて、すべての念仏者の宗教的平等を指しているからである。さらに、「同朋」の名称は、戦後、東西本願寺内部で起こった革新運動に付与され、以後特に被差別部落問題と結び付けられた。その結果、真宗の典型的価値観である「同朋」は人権の象徴である「平等」と密接

に重ね合わされてきた。図8に見られるように、僧侶の9割と門徒の8割にとって「部落差別はいけない」という意識がある。それに反対する信者の割合は極端に低い。被差別部落民に対する姿勢は、ある程度宗教意識のレベルに関係していると見られる。宗教意識の高い門徒に関しては、全体的に「部落差別はいけない」と答える割合はわずかに上昇する。

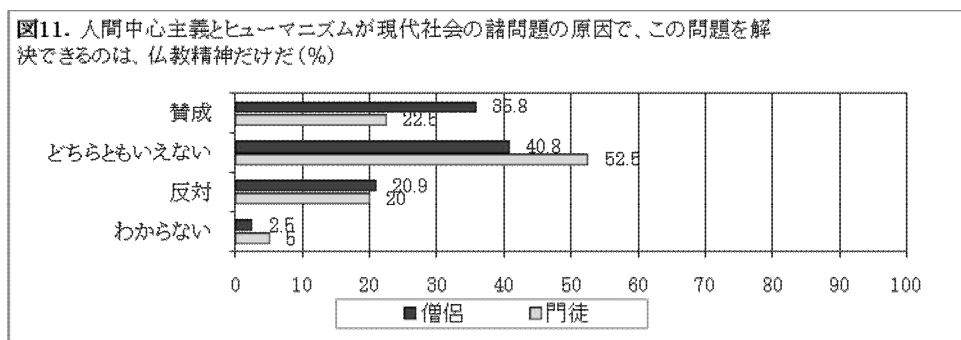
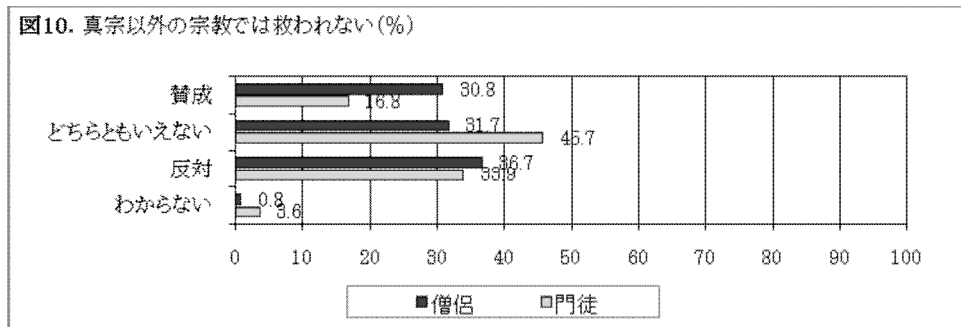


もう一つ確認を行ったのが、「同朋」という概念が経済的な平等という意味合いを持てるのかという問題で、そのためにアンケートでは図9に見られる項目を入れた。全国の平均と比較すると、経済的な平等志向を持つ真宗信者の割合は高い。青の棒グラフを見てみよう(左側)。経済的な平等志向を持つ人々の全国平均は27.1%(尺度1~5の合計の値)だが、門徒の場合32.5%に上昇し、僧侶の場合37.6%に達する¹²。全体的に経済的な平等志向と宗教意識には緩い関連性がある。

真宗において、「同朋」とは念仏者・真宗信者の平等を指す概念である。その概念が他の宗教の信者にどの程度まで当てはまるのか。これには追求の価値があると思われる。そのため、宗教的排他主義(つまり自宗教の優越性の強調)の指標として、アンケートに以下の二つの項目を入れた。一つ目は図10にある「真宗以外の宗教では救われない」という問いである。これに賛成の僧侶は30.8%である。反対の僧侶が36.7%であることを考えると、賛成の割合は相対的に高いと思われる。こ

¹² 同書、164頁を参照。

の関連で、住職と坊守の場合賛成の割合が約 45%に上がるのは意義深いことだろう。賛成の門徒はそれに比べると少なく、僧侶の割合の半分ぐらいになる。「どちらともいえない」と思う信者は多いというデータもある。



二つ目の宗教的排他主義の指標については、図 11 を見ていただきたい。これは真宗に見られる「ヒューマニズム批判」と関係する問いである¹³。ここでは「人間中心主義とヒューマニズムが現代社会の諸問題の原因で、この問題を解決できるのは、仏教精神だけだ」という意見に対する同意・不同意を尋ねた。賛成の僧侶は 35.8%に上るが、一方反対の僧侶は 20.9%のみ、という結果が出た。門徒の場合でも、反対意見よりも（20%）、賛成意見の方が高い（22.5%）。図 10 のケースのように、「どちらともいえない」と答えた門徒・僧侶もやはり多い。だが、真宗教団に宗教的排他主義の傾向が見られるのは否めない。

さらに、宗教的排他主義と宗教意識の強さには関連性が見られる。特に、第一のグループに属する宗教意識指標（帰敬式・報恩講・勤行・法話・真宗聖典・宗教書・念仏の称えに関する項目）を考察すれば、門徒のより高い宗教意識が宗教的排他主義へと結びついている様子が窺える。この指摘は「真宗以外の宗教では救われない」および「現代社会の諸問題を解決できるのは、仏教精神だけだ」という二つの項目

¹³ 真宗教団連合『真宗教団連合結成三十周年共同宣言』、2000年9月29日、真宗教団連合のウェブサイト、<http://www.shin.gr.jp/kyodan/102-30.html>。ウーゴ・デッセイ「現代の浄土真宗におけるグローバル化—価値の相対化、機能分化、社会倫理」『宗教研究』、360号、2009年、108-110頁を参照。

に当てはまる〔表6を参照〕。

表6. 宗教的排他主義 × 宗教意識（賛成の門徒割[%]）

	真宗以外の宗教では救われ ない	現代社会の諸問題を解決で きるのは、仏教精神だけだ
全体	16.8	22.5
帰敬式を受けた人	27.1	32.2
報恩講によく参詣する人	28.5	33.3
朝夕の勤行をよくする人	32.3	36.7
法話をよく聞く人	28.8	37.3
真宗聖典・宗教書をよく読む人	25.3	29.4
念仏の称えは仏恩を報謝するた めのものだけだと思ふ人	23.5	37.2
神棚にお供えをしない人	17.4	16.9
お守り・お札を持たない人	18.1	25.8
地域の神社行事に参加しない人	22.3	15.9
初詣でをしない人	22.2	25.0

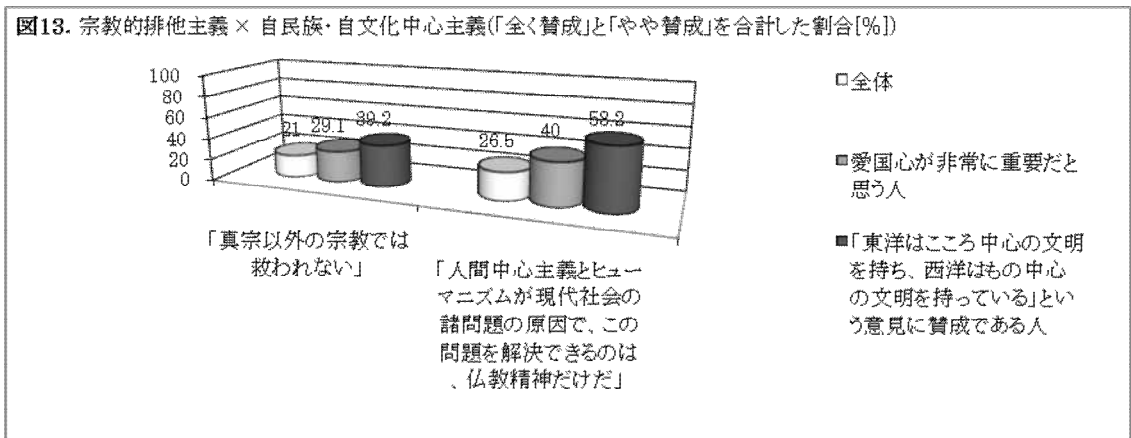
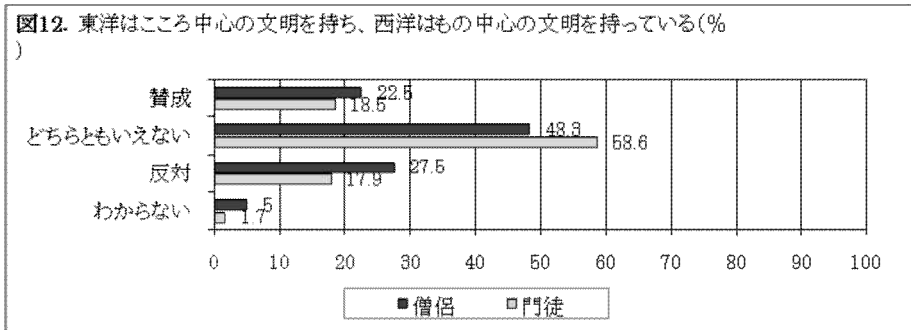
さらに検証を行ったのが、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義との真宗における関連性である。先述のとおり、真宗門徒の場合、ある程度の愛国心重視が窺える〔図7を参照〕。さらに愛国心重視と高い宗教意識との関連性という結果も出た〔表5を参照〕。自民族・自文化中心主義のもう一つの指標は図12に示す項目である。これは、特に幕末・明治時代以降日本の自民族・自文化中心主義を特徴付ける、「東洋精神文明」と「西洋物質文明」との対立についての問いである¹⁴。「東洋はこころ中心の文明を持ち、西洋はもの中心の文明を持っている」という意見に賛成の僧侶は22.5%、反対は27.5%との結果が出た。門徒の場合、賛成（18.5%）と反対（17.9%）の割合はほとんど同じである。未決定の信者の割合はかなり高く、この問題については真宗教団内にあいまいな態度が観察できる。

さて、真宗では宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義には関連性があるだろうか。

図13に示すように、「真宗以外の宗教では救われない」と思う信者の割合は21%だが、愛国心の強い信者の場合29.1%に上がり、「東洋精神文明」と「西洋物質文明」との対立を支持する信者については39.2%まで上昇する。同様に、「現代社会

¹⁴ 例えば、文部省・文部省教務局編『国体の本義・臣民の道』、日本図書センター、2003年を参照。

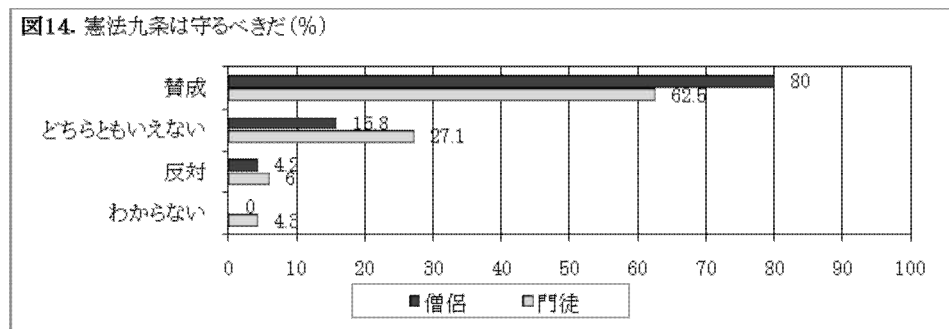
の諸問題を解決できるのは、仏教精神だけだ」と思う信者の割合は26.5%で、愛国心のある信者の場合40%に上がり、「東洋精神文明」と「西洋物質文明」との対立を支持する信者については58.2%に達する。このデータは、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義の結びつきが真宗に見られるということを十分に示している。つまり、真宗信者の自民族・自文化中心主義が強いほど、宗教的排他主義のレベルは高くなると言えるだろう。



6 . 真宗教団における非暴力

「平等」と同様に「非暴力・不戦」は真宗信者にとってとても重要な価値観とされている。表1に示したように、この価値観を選んだ僧侶は87.5%で、門徒は82.5%である。「非暴力」とは近代的な価値観であると共に、真宗的な意味合いも持ち、「兵戈無用」と「世の中安穏なれ」という表現で真宗聖典に出てくる概念である。教団の組織レベルでは非暴力重視が戦後の現象だが、その転換点となったのは1980年

代から始まった真宗教団の戦争責任の反省である¹⁵。個人レベルでは「非暴力」重視の姿勢が憲法九条の擁護にも見られる。図 14 に示すように、「憲法九条は守るべきだ」と思う真宗信者は多い。特に僧侶の割合は 80%で、門徒の割合は 62.5%である。



面白いことに、憲法九条の擁護と宗教意識にも関連性があるようである。特に「念仏の称え」と第二のグループに属する指標の場合、宗教意識が高ければ高いほど「非暴力・不戦」への献身が強くなる傾向が見られる〔表 7 を参照〕。同様の懸念は自衛隊派遣の問題にも見ることができる。つまり、自衛隊派遣を支持しない真宗信者の割合が高いのである。門徒の場合、不支持は 6 割で、僧侶になるとそれは 8 割に達する。憲法九条の支持率と自衛隊派遣の不支持率に関しては、新聞社・通信社が調べた全国平均よりも、多くの場合真宗信者の割合の方が高い¹⁶。

最後に、死刑制度に対する真宗信者の姿勢について若干述べたいと思う。2004 年に内閣府大臣官房によって行われた死刑制度についての世論調査によれば、死刑制度の支持率は 8 割である¹⁷。図 15 にあるように、死刑制度を支持する信者の割合はそれよりも低い。僧侶の場合、死刑制度の支持より（41.6%）、不支持の方が高い(47.5%)。門徒の場合、支持は 56%で、不支持は 26.8%である。真宗教団では死刑制度への反対意見がかなり強いようである。表 8 に示すように、死刑制度に対する姿勢と宗教意識にはある程度の関連性が見られると言って良いだろう。全体的

¹⁵ Ugo Dessi, *Ethics and Society in Contemporary Shin Buddhism*, pp. 147-148 を参照。

¹⁶ たとえば、『朝日新聞』、2008 年 5 月 2 日

[<http://www.asahi.com/national/update/0502/TKY200805020272.html>]、2004 年 3 月 4 日

[<http://www.asahi.com/special/shijiritsu/TKY200403150268.html>]

『中日新聞』、2007 年 7 月 8 日

[<http://www.chunichi.co.jp/hold/2007/saninsen07/main/CK2007070802030628.html>]を参照。

¹⁷ 内閣府大臣官房政府広報室「基本的法制度に関する世論調査」、2004 年 12 月、内閣府のウェブサイト [<http://www8.cao.go.jp/survey/h16/h16-houseido/2-2.html>]を参照。

には、高い宗教意識は死刑制度支持の低下に軽に対応する。しかし、真宗聖典・宗教書をよく読む、初詣でをしない、念仏の実践をより理解している門徒のケースでは、支持しない割合がかなり高くなる様子が窺える。

表 7. 「憲法九条は守るべきだ」 × 宗教意識（「全く賛成」と「やや賛成」を合計した割合[門徒%]）

全体	62.5
帰敬式を受けた人	66.1
報恩講によく参詣する人	62.6
朝夕の勤行をよくする人	65.6
法話をよく聞く人	63.5
真宗聖典・宗教書をよく読む人	70.6
念仏の称えは仏恩を報謝するためのものだけだと思う人	74.5
神棚にお供えをしない人	70.6
お守り・お札を持たない人	72.4
地域の神社行事に参加しない人	65.9
初詣でをしない人	70.9

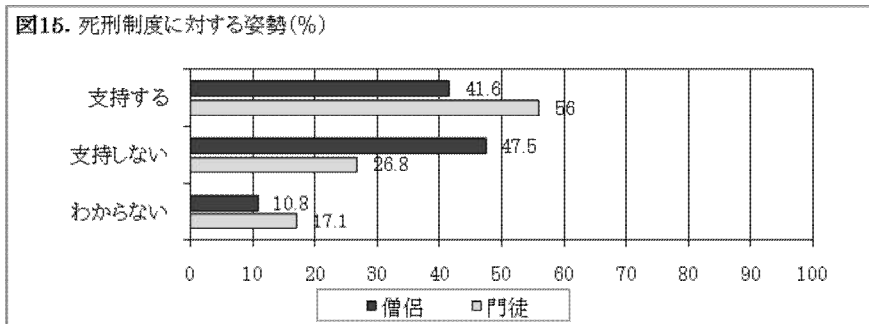


表 8. 死刑制度に対する姿勢 × 宗教意識（門徒%）

	支持する	支持しない
全体	56.0	26.8
帰敬式を受けた人	53.4	30.5
報恩講によく参詣する人	53.7	31.7
朝夕の勤行をよくする人	48.9	28.8
法話をよく聞く人	50.8	30.5
真宗聖典・宗教書をよく読む人	47.4	37.9
念仏の称えは仏恩を報謝するためのものだけだと思う人	41.2	35.3
神棚にお供えをしない人	53.2	31.0
お守り・お札を持たない人	53.4	30.1
地域の神社行事に参加しない人	54.2	29.8
初詣でをしない人	50.1	38.9

7. 結論

以上の調査結果は、次のようにまとめられるだろう。他力という教義は必ずしも信者の道德性に障害になるわけではないようだ。個人レベルでは善行への意識があり、真宗的道德の特性を表す要素が見られる。全体的に、「心の平安」、つまり宗教的・精神的な生活への傾向があるが、それは社会活動への意欲・参加に乏しいことを意味するのではない。だが、特に門徒の場合は政治的に中立の活動に参加する傾向が明らかである。回答者には「思いやり」重視の姿勢が顕著だが、最も重要な価値観として、日本の伝統的価値観である「協力」、「正直」、「礼儀」、「人への尽力」、「親孝行」を選ぶ信者が多い。信者が「親孝行」を選ぶ割合の方は、全国平均と比較すると低い。日本の伝統的価値観「恩返し」と重なる「報恩・仏恩への報謝」という宗教的価値観はよく強調されている。僧侶より、門徒の方が権威主義的価値観を重視するが、全国平均と比べれば、その支持率はある程度低くなる傾向がある。そのため、真宗信者の伝統的傾向が権威主義的価値観に一致するとは言いがたい。だが、権威主義的価値観と宗教意識には関連性が見られる。真宗信者が「平等」という真宗的及び近代的価値観を重視する様子はある。この概念は念仏者の平等以外に、おそらく他の社会問題に当てはまるが、他宗教の信者の宗教的平等は全面的には認められていないようである。それに加えて、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義には関連性が窺える。また、信者の道德観念はもう一つの真宗的及び近代的価値観によって特徴付けられている。即ち、真宗教団では「非暴力」が重視され、それが平和と死刑制度に対する信者の姿勢に意味合いをもつようなのである。

キーワード:

真宗道德、社会的行動、伝統的価値観、権威主義的価値観、近代的価値観

KEYWORDS:

Shin Buddhist morality, social behavior, traditional values, authoritarian values, modern values

* 校正していただいた菅野類氏に感謝を表したい。本研究は、日本学術振興会科学研究費（外国人特別研究員）の助成を受けてなされたものである。私の受け入れ先であった大谷大学、ならびに協力をしてくれた皆様に感謝したい。この調査結果に基づいた別のバージョンの論文は Japanese Journal of Religious Studies で英語で出版される予定である。